

---

# 田中家の一週間

原ひじり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

田中家の一週間

### 【Nコード】

N0611D

### 【作者名】

原ひじり

### 【あらすじ】

わたしはマンションの管理人田中家の人々の世話人をしている。田中家の人々は少し変わっていて、あたたかくて少し悲しい。田中家はわたしがいないときと繋がれない。

## 青い傘

「こんにちは。今日は雨が降るそうですよ。」

右手に傘を二本持った男が声をかけてきた。エレベーターの前に立たれては下へ降りれない。わたしは両手をそれぞれジーンズのポケットにひっかけている。ようするに傘などもっていない。

「こんにちは。そうなんですか、あまりニュースなどはみないので、確かに曇った朝だ。すこしほこりっぽいにおいもする。だが今日のわたしに傘は要らない。日曜の今日は朝の八時から夜中九時まで田中家で働かなくてはならないからだ。田中家はわたしが住むこのマンションの一階にあるので、もし雨がいままさに降っていたとしてもわたしは傘をささずに出勤できる。」

「ならこの傘をお使いなさい。僕は二本も持っている。」

長身の男はにこにこして青い傘を一本わたしにさしだした。断らなければ。面倒はきらいだ。この男に対してこのときまで敵対心はなかったが、男の左手に光るものを見てすぐにわたしは愛想をふくんだ笑みをつくった。

「本当に？ありがとうございます」

声を高くして傘を受け取ったわたしの態度に満足したのか、男は笑顔のまま頷いてわたしの横を通った。背後を歩いていく気配がしたが、どこへ行くかも確認せずにエレベーター横の非常用階段を一気に駆け下りた。頭の中は男の左手にあった、黒い長包丁でいつばいだった。

田中家はこのマンションの一階から五階にかけた全二十五室を管理している大家さんだ。一階の五部屋は田中家が使用していて、それを除いた二十部屋には全てひとが住んでいるらしい。駅まで徒歩五分だが周りにも高さのある建物があるためか電車の騒音は少なく、コンビニは近くに二つある。家賃は市内にしてかなり特価の月三万

八千円。広さは異なってもどうやら家賃は全室おなじのようだ。広さによって家賃をそれぞれ決めるのが面倒だったのだろう。田中家の主人、隆文さんはそういう人間だ。

隆文さんの部屋は一階の一 一号室。非常用階段の最後の扉を開いて一番近いドアに赤い鍵を挿し込む。鍵を挿したままノブを廻さずに押してくると中に入った。お気に入りの健康サングラスを投げ捨ててタバコのおいを吸いながら薄暗い部屋に飛び込んだ。部屋は広いワンルームで廊下が無い。大きな窓のカーテンを閉じたままの部屋でいつもの挨拶もなしに叫んだ。

「変質者が！」

「ひどいな、今日はパンツをはいているのに」

起きていたのか。部屋の端のダブルベッドにひとりであぐらをかいてうたた寝になっていた。隆文さんがかすれた声をだした。

「ちがう、隆文さんじゃなくて、男のひとがあたしの五階の部屋の前に立ってて」

「昔の男か」

「ちがうってば。包丁持ってた」

「えっ」

やっとこっちを向く。

「刺されたの？」

「いや、傘貸してくれた」

「怪我はないの？」

「うん。でもびっくりにしたよ……」

「その傘？いい傘じゃない」

「え……わっ」

持っていた傘を落とした。

「特注物じゃない？」

びくびくしながらそれを観察してみる。なるほど、言われて見ればわたしが持っているような一本五百円のものとは違っている。しっかりした太さの柄に光沢のある生地。

しかし、不審者より傘に興味を示すのは、大家としてどうなのだろう。

田中隆文、五十八歳。とても年相応とはいえないしっかりした筋肉をしている。パンツ一枚で年頃の女の子の前を寝起き顔であるく様は、紳士ではないが色っぽい。脱ぎ散らかされた衣類およそ一週間分をひとつひとつ拾って歩く。下着と靴下だけでも洗濯籠に入れて欲しいとたのんであるのだが、このおじさんがきくはずがない。わたしは毎週日曜朝八時に――一号室にきて、洗濯物を片付ける。仕事着であるスーツ類は紙袋に入れて後からクリーニングに出す。他は洗濯機へつつこんで洗う。脱水が終わるまでに二人分の朝食をつくる。冷蔵庫にはいつもそこに食べ物が入っているので困ることなく料理ができる。味噌がきれた、なんてことはまれた。今日はネギと豆腐とじゃがいもとワカメの味噌汁、鰯の干物、簡単炊き込みご飯とだしまき卵をつくった。洗濯機がなっているが後回しにして、ジーンズにポロシャツを着た清潔な隆文さんが食卓に着くのを待つてから箸を取った。もう何度目かわからない見慣れた朝。

「モモちゃんほど味噌汁つくるのがうまい女とは、俺は寝たことはない」

「うん、寝た覚えはない」

「最近、玲於奈見ないけど、あいついるの？」

「いるよ。論文の締切り前とかで日曜しか帰ってこないけど」

父親なら知つとけよ、とは言わない。

「陽子が面倒みてるならいいが」

奥さんなら先々週から日本にいませんよ、とは言わない。

「そつえば陽子さんに頼まれたんだけど、大介くんの部屋に置くヒーター選んでくれて。予算とかある？領収書もらってくるけど」

「いや、適当なものを選んでやってくれる？モモちゃんに任せるよ。大介のことは僕よりだいぶ詳しいだろう」

セックスの後寒い、といってヒーターを親にせがませたのはわたしだ、なんて言えない。

「ごちそうさま」

きれいに食べ終わると隆文さんはソファにどっかり座って経済新聞を端から端まで読み始める。ちょうど読み終わるころには、わたしは洗濯物を干し終えて掃除機をかけゴミをまとめ、冷蔵庫の足りないものをメモにとりスーツの入った紙袋をそろえているところだった。時計の針はぴったり、正午をさしている。

「なにか他にすること、ある？」

「完璧だ。今週も素晴らしい日曜日を迎えたよ」

「じゃあなにか欲しいものあったらメールしてね。来週持ってくるから」

「ありがとう。じゃあまた日曜に」

ドアを閉める。オートロックのいいところはドアの内側の人間が鍵をかける音がしないところだ。小雨が降っている。わたしの右手には洗濯物の入った紙袋が、左手には怪しい傘がある。だが今日のわたしは傘は要らない。次の仕事場は――二号室、隆文さんの息子である田中大介の部屋だからだ。

## 青い傘 二

— 二号室の鍵は柄に赤いハートのシールがついている。恋人の部屋の鍵だから、とかそういうかわいらしい恋心からではなく、気づいたら大介くんが貼っていたのだ。鎖しこんで、押す。雨天のせいもあってか部屋は薄暗い。細い廊下をまっすぐ行くと、くもり硝子のはめ込んだドアがある。このドアにも鍵はついているが、ノブを廻すと今日は開いた。この部屋は一階の中で一番小さい、と思うのは、物が多いからでもあり大介くんが大きいからでもあるだろう。それに隆文さんと違って、このひとは部屋を仕切る。部屋には薄い大型テレビ、その前に三人座れる黒いソファ、中間に硝子のミニテーブル、壁際にパソコンデスクとパソコンが二体。オーディオ器、本棚、DVD、物というものがあって、でも意外にも無くてこまるものもある。掃除機とか。

「……でかい」

大介くんはがっちりしている。市役所のゴミ回収、運送屋、引越しセンター等のアルバイトを趣味のように平日こなし、ご飯をいっぱい食べる。平日は朝五時から夜九時まで仕事の日もあり、週末の日曜日だけはしっかり朝寝坊する。

百八十五センチ、六十五キロ、二十四歳の男の子がピンクのくまの抱き枕を抱えてぐっすりと眠っている。このくまさんは青いものがわたしの五階の部屋にもある。大介くんが買ってくれた。このひとは嬉しいことにいいものしかくれない。寝室にも物があふれている。洋服タンスが三つ（一番小さいタンスはわたし用だ）、小さいテレビ、ゲーム。歩くところがない。が、散らかっているわけでもない。大きなベッドに寝た大きな恋人の太い首を見つめる。わたしのだいすきな首。ぽん、と叩いてみる。起きない。

「お昼だよ」

ごろりと巨体が体をひねった。目が合う。短髪がよく似合う、浅

黒い顔。

「キスしてくれるの待ってたのに」

「おはようダーリン、っていうやつ？今度ね」

ふふつと笑って首に腕を巻きつけた。あまいにおいがする。バタ  
ーみたいな。

「お昼ごはんどうする？つくるか食べにでかけるか」

「チャーハンつくってほしい。じゃこの入ってないやつ」

「わかった。お風呂お湯はところうか」

「ありがとう」

大介くんは起き上がるとわたしを見下ろしおでこにキスをした。

外人みたい。

お風呂場に行きすでに磨かれた浴槽にお湯をはる。どぼどぼと勢いよくあたたかいお湯が出る。ボタン一つですぐに温かいお湯が浴槽の壁の穴から出る光景には、まだ慣れない。台所にたつてピンクのエプロンをつける。エプロンは一つしかなくてフリルが少し付いている。普段わたしの恋人は構わずこれを身につける。それはもう愉快的な光景だが、わたしは笑わない。笑うときつと二度と見れなくなるからだ。中華なべを温めて油をひく。炊飯ジャーに残っていた冷ご飯をいれてネギ入りの溶かした卵を絡ませる。タマネギ、レタス。じゃこも入りたいが我慢した。切りすぎたタマネギを中華スープの素と一緒に湯に入れたスープもできた。簡単なご飯がすきなのはわたしも大介くんもいっしょ。

お風呂場からドライヤーの音が聞こえる。タオル一つで乾きそうな髪にもきちんドライヤーをあてるのは、陽子さんの教育なのだろう。

「いいにおい」

「じゃこはおいしいのに……」

「今日はいいんだ」

「さっきご飯食べた気がするのに、もう一時なんだ。四時間も経ってる」



大介くんがソファに、わたしは向かいの座椅子に腰掛けてれんげをとった。

「いただきます。」

「いただきます。」

「父さん、元気？あ、レタスうまいな」

ついでを装ってきく。まったくこのひとは不器用だ。

「元気だよ。あいかわらず大介くんに負けられないいい体してる」

「モモはパジャマを着て寝る男は女々しいとか思ってるんだろ」

「それでお腹壊すより、頭つかってパジャマ着るほうが賢いよ」

「冷え性の男は賢い。生姜の紅茶だつて淹れる」

「お昼から買い物いくけど、くるよね」

チャーハンから顔を上げて大介くんをみると、目が合った。ずっと見てたんじゃないよな。

「もちろん」

「雨が降ってるから、バスでいい」

「歩こうよ」

この歳の男のひとはみんな運動がすきなんだろう。あたしの周りの男の子はみんな面倒くさがりだ。

「おれ、傘さすからモモは歩くだけでいいよ」

今度は目をふせて言った。運動もわたしも愛されている。

「あ、傘！」

「傘？そついやおれの壊れてたかも。もってきた？」

「いや、あたしのじゃないんだけど、男物の青い傘が」

「父さんの？」

「違う……朝五階に男のひとがきて、くれたの」

大介くんの右手が止まる。これは言わない方がよかったかもしれない。

「だれ」

「知らないひと、ほんとに。四十歳くらいかな」

「傘くれたって、なんでもらったの？モモなら断れるだろう」

「それは、普通の場合」

傘をもらったことに腹をたてるだけならいい。包丁をもっていたなんていったらどうだろう。逆上してあの男を探しに行こうものならそんなの怖くていけない。

「普通じゃない場合ってなに」

「なんかこわくて」

「それだけなの」

「こわくて」

うそではない。

「わかった。外出するときはきをつけてよ。そんなことがあるならなおさら」

真剣な表情でいってくれる。なぜか顔がゆるむ。

「うん」

顔を見合わせてふふ、と笑う。これを食べ終わったら買い物へ行く。大介くんのさす傘に二人で肩をあわせて。それはちよつと幸せだと思う。

もし傘がなかったら。ふと考えた。買い物は行かなかったかもしれない。朝の包丁の男に口の中でありがとう、と言って、スープで流し込んだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0611d/>

---

田中家の一週間

2011年1月20日14時47分発行